

位相論的語史の試み

— クスシユビとクスリユビ —

要 旨

語彙史においては、国語史の他の分野に比べて、階層および文体という位相面での変異の幅が、相当大きかったと想像される。そのありさまを明らかにするためには、文献的方法が不得手としていた庶民階層の口頭語史の把握を、方言地理学的方法で補い、その結果から、従来の語史記述を見直すということが、一つの有効な方法と考えられる。

本稿では、そのような試みを、薬指の名称を例に行ってみようとした。クスシユビとクスリユビは、文献と方言への現れ方に、著しいアンバランスを呈するが、それを糸口に、両語の使用時期と位相差を考察し、次の結論を導いた。すなわち、クスシユビとクスリユビは、中央国語史上すでに中世において、位相を分かちながら共存していた語であり、前者に上層語的・文章語的性格が、後者に庶民口頭語的性格が、それぞれ強かったと認められる。

一 はじめに

文献からたどりうる国語史の流れが、基本的に、上層知識階層に

小林 隆

おける、規範性や文芸性に満ちた書記言語の変遷であると認められるならば、そのような国語史の陰に、それとはいくぶん異なった形で、庶民階層の口頭語史の流れが存在したことは、想像に難くない。そして、そのような伏流としての庶民口頭語史は、文献へ露頭するその徴証を丹念に発掘し、つなぎ合わせることにより、探ろうとされてきた。しかし、そうした方法が、一般庶民の話しことばの豊富な変遷をとらえるのに、これまで満足のいく成果をもたらしてきたとは、必ずしも言えない。

ところで、方言は、語史資料としての面から、その位相的特徴を検討すれば、庶民階層における話しことばの推移を反映するものと評価される。^{注1)}したがって、庶民口頭語史の記述に方言を利用する価値は、十分認められるであろう。従来、文献から消極的にしか把握しきれなかった下層の日常語の変遷は、方言を資料とすることにより、多少とも積極的にとらえるのではないかと考えられるのである。

そもそも、これまでの文献による語史記述においては、位相的な側面について、進んで注意を払おうとする姿勢が弱かったことは否めない。例えば、そこでの記述が、いかなる階層のどのような文体

における変遷を目的としているのか、明確な位置付けを行わず、異質の資料を列ねて記述を行うことが見られた。方言を語史資料として対比的に用いることは、そのような従来の文献に基づく語史を、位相的観点から見直し、補強することにつながる。そうすることに、語史の記述に位相的視野の拡大をもたらすこと、それが本稿のとうとうとしている立場であり、「位相論的語史」と題したゆえんである。

さて、これまでも私は、顔や踝の語史記述^{注2}に際し、右で述べたようなことには一応の注意を払ってきたが、本稿においては、その中心的な課題として、語史の位相というテーマを据えてみたいと考える。具体的には、類似の形態をもつ二つの語が、文献と方言への出現のさまを著しく異にするという事例を、薬指の名称の変遷に求め、そのくいちがいの背景を、位相的観点から論じようと思う。

二 文献と方言とのくいちがい

指の名称の変遷については、すでに前田富祺氏の詳細な研究がある^{注3}。にもかかわらず、ここでふたたび薬指を話題にしようとするのは、その語史の一環をになうクスシユビとクスリユビという二つの語について、位相面での再検討が必要と思われるからである。

今、前田氏の研究に従って、薬指を表す種類の語の、文献への主要な出現時期を示せば、およそ次の通りとなる。ナナシユビの類(奈良^{兼倉}、クスシユビ(兼倉^く江戸前期)、ベニサシユビの類(室町末期^{明道})。そして、現代の共通語の地位にあるクスリユビの登場は、以上の語の出現にはるかに遅れること、江戸時代の半ば以降の出来事である。その初出は、享保二(一七二七)年初版の、『書言字考節

用集』であるものの、後続の用例は、それから百年ほど下り、一九世紀以降のものがほとんどである。

一方、これらの語の方言分布を、国立国語研究所『日本言語地図』第十四図「薬指」によって概観すれば、ナナシユビの類が琉球を中心に分布し、また、ベニサシユビの類が九州に至る西日本一帯に広がっており、これらの語の、方言上の分布状況と文献上の出現時期との対応は、大きくずれることはない。ところが、クスシユビについては、その存在を方言分布に全く見出すことはできず、これに對して、クスリユビが、東日本一帯から全国に及ぶ広大な分布領域を形成していることが知られる。文献上、中世を代表する語であったはずのクスシユビが、方言分布に全く現れず、一方、近世も後期になつてようやく文章に記されるクスリユビが、方言上巨大な分布を呈するという、そのようなくいちがい^{注4}が認められるのである。

クスシユビとクスリユビの、文献と方言におけるこのアンバランスな対応は、どう説明されるべきであろうか。結論を先取りして示すならば、私は、二つの語が使用された位相の違いこそ、その不均衡を生じさせた最大の原因と考える。以下にその解釈を述べてみたいと思う。

三 クスシユビとクスリユビの位相

文献上使用された語が、方言分布に現れてこない現象については、およそ次の三つの理由が考えられる。すなわち、(1)時代的要因、(2)意味的要因、(3)位相的要因、である。

このうち、まず、時代的要因とは、中央の文献での使用時期が極めて古い語の場合には、たとえ地方に伝播したとしても、すでに方

言から消滅してしまっている可能性があるということがある。

しかし、この理由は、室町時代を中心に使用時期をもつクスシユビには当てはまらない。奈良や平安時代の語ならばともかく、室町時代に用いられたものならば、当然、方言にある程度の分布をもってよいはずである。なお、『日本語地図』には、クスシユビとイシャユビという語が極少数点在し、これらをクスシユビの後裔と見る解釈があるが、しかしこれらの語は、クスリユビからそれぞれの土地で、音声的事情に基づく語形変化(例えば伊豆諸島では語中のr音の脱落やj音化が起こりやすい)や、薬一医者^{注5}の連想、他の人物名を冠した指への類推などによって発生したと考えるべきである。これらの語を、クスシユビの子孫とみなすには、そもそも、クスシユビ自身が一地点も存在していないことが最大の障害となる。

次に、意味的要因とは、いわゆる語形の「隣接意味への染み出し現象」により、中央では薬指の意味で使われたクスシユビが、地方への伝播の際に、別の指を表すように姿を変えてしまったという可能性である。しかし、そのような情報は得られておらず、この意味的な理由も支持することはできない。

以上のように、時代的要因と意味的要因を消去すると、残る可能性は位相的要因のみとなる。すなわち、クスシユビは、その使用の場が文章活動を中心としたものであったか、あるいは会話の中で用いられたとしても、上層知識階層に限られた言い方であったために、みやこの外へ放射されることがなかったと推定されるのである。

これはどういふことかと言えば、中央のことばの周囲への伝播は、みやこの庶民と地方の庶民との日常生活上の交流が最大の力となつて起こると認められるから、地方へ広まる語とは、位相的には、な

によりも庶民階層の口頭語として勢力をもつた語であるはずなのである。したがって、クスシユビが、みやこの外に見られないとしたら、それには、今述べたように、この語が中央の一部上層の閉ざされた社会にしか通用しないことばであったために、伝播力をもちえなかったということが、有力な理由として考えられるわけである。^{注6}この語の構成要素であるクスシ(薬師、すなわち医者という職業が、庶民や地方人にとつて、どれほど親しい存在であったか、やや疑問である点も、クスシユビという語の階層的閉鎖性を憶測させずにはおかない。

さて、そのように、クスシユビが上層のことばとして使用されていたのと同じ時期、つまり、中世において、一般庶民の方とは言え、日常会話の中で、すでにクスリユビを使っていたのではあるまいか。そして、その伝播が全国に向けて、着々と進んでいたのではなかったろうか。最初にも述べた通り、方言分布が中央における庶民の口頭語史を反映するものであるとすれば、東西に及ぶ広範な分布領域を形成する原動力となった、中央のクスリユビは、庶民階層を中心にかなり古くから用いられてきたと、考えざるをえないのである。

それでは、そのように活発に使用されたはずのクスリユビが、なぜ中世の文献に全く見られないのかと言えば、その理由は第一に、庶民口頭語というクスリユビの位相的性格自体の中に求められるべきであろう。しかも、「相当する有力な文字言語がある」ことばは書かれなまま終わることがある、という紫田武氏の指摘に従うならば、この場合、クスシユビという相当する有力な文字言語をもつクスリユビは、容易に文献に現れなかったはずである。特に、シとり

という一音の差は、文献の書き手に、その点がなう雅俗の意識についての注意を、鋭く喚起させたにちがいない。

もちろん、中世ともなれば、口語的性格が現れた文献は増えてくる。しかし、現在得られている薬指の用例を存する文献は、作法書・故実書の類が多く、口語性をもつ文献は、『孟子抄』と『日葡辞書』程度にすぎない。しかも、これらの文献として、その基調が文章に記すにふさわしい語彙によつて以上、クスリユビが現れなかつたとしても、特別不思議ではない。

今、『日葡辞書』の時代において、『片言』の記述やその他の資料により、一音の違いが正俗の意識に結びついていると認められる語形の組み合わせを見ると、そのうち俗に当たる方の語形を、『日葡辞書』が載せないケースがかなりあることがわかる。例えば、オーユビとオヤユビ(拇指)〔上が正、下が俗〕、オトトイとオトツイ(二昨日)、クチビルとクチピロ(唇)、ナメクジリとナメクジラ(蛞蝓)、ユビとイビ(指)、ケムリとケム(煙)、フクローとフクロ(鼻)、などがそれぞれである。ここで問題にしているクスシユビとクスリユビの組み合わせも、そのようなケースの一例であつたと考えられる。

以上、クスシユビとクスリユビの、文献と方言分布への出現状況のくいちがいを、両語の位相差に原因を求め、説明した。しかし、その結論への到達は、あまりに性急であつたかもしれない。もし、右の解釈に問題があるとすれば、その最大の焦点は、クスリユビの存在を、はたして本当に中世にさかのぼらせうるかどうかということにある。そして、この点を確かなものとしていくためには、

- (1) 文献の側で、クスリユビの用例を博捜し、中世にさかのぼるもの(しかも、口頭語的・庶民語的性格の認められる文献の用例なら

好都合)がないか、調べることに。

- (2) 方言の側で、薬指の方言分布を丁寧に解釈し、クスリユビの古さを方言地理学的に証明すること。

の二つが必要となる。以下では、その点の検討を行う。^{注8)}

四 文献上のクスリユビ

四・一 同一文献の諸本における語形の異同

先に述べた通り、前田氏の研究におけるクスリユビの最古の確例は『書言字考節用集』(二七一年初版)であつた。それより古い文献の用例の発見に努めたが、管見では現在のところ、探してはいない。

そこで、次の方法として、前田氏の示されたクスシユビの用例をもつ中世成立の文献^{注9)}について、諸本の異同を調べ、中に、クスシユビの代わりにクスリユビと表記されたものがないか見てみることにした。書写者の不用意な態度が、ときとして、^{注10)}文献に当時の口頭語を露出せしめることがあることは、知られている。そのような数少ない機会を、積極的にとらえてみようというのがねらいであつた。

しかし、結果的には、クスシユビをクスリユビとした写本は、これまでの調査の範囲でほとんど認められなかつた。異同のあつた文献は、わずかに次のものである。

まず、『孟子抄』には、東洋文庫と内閣文庫の一四冊本に、以下のようにクスリユビが現れてくる。すなわち、東洋文庫本に「くすりゆび」が二例(共に巻二54オ)。内閣文庫本に「くすりゆび」(巻一58オ)。「くすりゆひ」(同58オウ)。しかし、この本の内容は、世に知られている清原宣賢の講述とは別系統のようであり、その成立

は後世のものと思われる。書写の時期も、おそらく江戸時代後期をさかのぼることはなからう。したがって、この用例をもって、室町時代にクスリユビが存在したことの証拠とすることは、とうていできない。

次に、『女房進退』（室町末期—江戸初期成立の故実書）には、「くすりゆひ」と「くすしゆひ」の両方の表記が近接して見られる。この点について、前田氏は、前者の、「くすりゆひ」の方が転写の誤りであらうとの判断を示し、クスリユビの確例からは退けられた。確かに、東大史料編纂所と内閣文庫の近代の写本では、二つの表記をとっているが、江戸時代の書写と思われる、宮内庁書陵部蔵本（内題は「女房衆しつけの事」）では、両例とも「くすしゆひ」（26才）で統一されておられ、この事実は、前田氏の考えを支持するものと言えそうである。

以上の二つの場合に比べて、次の『就弓馬儀大概聞書』の一本に現れたクスリユビのケースは、やや重要なものと考えられる。

『就弓馬儀大概聞書』（別名、高忠聞書・美人草・美人雑）は、多賀豊後守高忠が、小笠原流の弓馬の故実を集め、寛正五（二四六四）年に編し終えたものであるが、その需要の高さから、比較的多くの写本や版本が残されている。この書の第二条「ゆがけのゆびをつぐ事」には、四箇所にクスシユビが現れ、これを諸本で調査すると、尊経閣文庫蔵室町末期写「高忠聞書」が、一箇所を「人さしゆひ」と誤り、別の一箇所に「薬師指」（以上2才）と漢字を当てる他は、大多数が「くすしゆひ」「くすしゆび」あるいは「くすし指」という表記をとっている。

ところが、わずかに内閣文庫蔵慶長八年写『就弓馬之儀大概聞書』

に、「くすりゆひ」（10ウ）が一例、そして、宮内庁書陵部蔵江戸中期写『美人草』に「薬」「薬ゆひ」（いずれも巻一ウ）と記した例が一例ずつ認められた。後者の漢字を当てたケースについては、後ほど取り上げることとし、前者の場合を少し問題にしてみた。

四・二 内閣文庫蔵『就弓馬之儀大概聞書』のクスリユビ

内閣文庫所蔵の『就弓馬之儀大概聞書』は、外題を「弓馬二百廿ヶ条」とし、目次からなる上巻と、内容にあたる中巻とを一冊に綴じ込んだ写本である。目次には、二二三ヶ条を掲げるが、中巻の内容は一一六ヶ条で終了しており、その直後に、「小笠原光清之御本うつつす也」（最終丁オ）、末尾に「慶長八年卯月十二日ニ書之」（最終丁ウ）の識語をもつ。その筆は本文と同一と認められ、この写本を慶長八（一六〇三）年時のものでないとする積極的な根拠は、見つからない（内閣文庫図書分類目録）も、慶長八年写とする。ただし、小笠原光清なる人物については、諸系図になく、今のところ不明である。

そして、この写本においては、他の諸本が統一的にクスシユビを用いる四つの位置のうち、一つ目に「人指ゆひ」（10ウ8行）、三つ目に「くるし指」（同11行、意味不明）とあり、四つ目は内容的に省略されている他、二つ目の位置に、明らかに「し」ではなく「り」の仮名を用いた「くすりゆひ」の表記が見出せる。今、その部分を引用する。

其後二大ゆひくすりゆひはかりをことかわにてつき初羅禮たり
（ゆかけのゆひをつく事、10ウ9行）

さて、このクスリユビの例をどう解釈すべきかというに、この写本の書写態度、およびそこに現れたいくつかの言語上の特徴により、

次のように考えることが許されるのではないかと思う。

まず、書写態度について問題にするならば、第一に、この写本の段階以前に生じていた可能性もあるが、他の諸本に比べ、内容が簡略であり、欠落する条項があり、あるいは正反対のことを記す部分がある。また、書写の用紙は、すでに使用済みの文書の紙背であり、表の墨が透けてきているのをかまわず用いている。筆遣いは、あまり丁寧とは言えず、一丁あたりの行数および一行あたりの字数に、かなりの変動がある。そして、誤字・脱字が目立ち、語句の脱落、重複も見られるため、中には文意の通じかねる箇所もある。さらに、先に示したような、識語の部分を漢字表記で統一せず、「うつす也」と仮名を交えるところは、他の写本にはなく、注意しておいてよい点であろう。

以上の特徴を総合的に判断するならば、この内閣文庫本の作製者は、上層知識階層の中でもやや下寄りに属する人であったのかもしれない。もちろん、それは想像の域を出ないにしても、少なくともその書写態度については、厳格なものと言えないことは確かである。後世に残す正式な写本を作るという意識よりは、大体の内容を手元に控えられればよいとする気持ちだが、この書写者においては勝つていたと考えられる。そして、そのような、いわば気軽な書写態度が、ときとして不用意に、その文章の中に、当時の口頭語を出現させてしまった可能性は、十分ありえたとはいえない。実際、そうした徴証は、次のようなところにとらえることができる。

まず、仮名遣いについて言えば、語中・語尾において、他の写本が八行の仮名で記すところを、ア行あるいはワ行の仮名で記すところがあり、特に、「かわ(皮)」「あい(間)」など、ハをワ、ヒをイとす

るケースが目立っている。また、格助詞のヲをオと記す場合も多い。開合では、「蠟色」を最初「ろう色」と記し、脇に「らう」あるいは「ら」と訂正した例(17オ9行・22オ11行)や、「寸ほう(法)」「20オ3行」の例が見られ、その他、「へよう(豹)」「14オ12行」、「へよう(表)したる」(20ウ1行)の表記が特徴的である。これらは、総じて、口頭語に引き寄せられた表記として説明することが許されよう。

次に、活用の方では、一段化の例として、「もちいる也」(13オ1く2行)を指摘することができる。また、はじめ「持せる間」と記し、傍らに「す」と訂正したケース(11ウ7行)も確認されるが、近世前期の上方で、助動詞のスルを一段化させた例は少ないと言^{注11}うから、これは、口頭語がいち早く現れた注意すべき事例と思われる。その他、「き(切)つて」(16オ1行・17オ8行)と、促音便形が認められる。

最後に、語彙の点では、馬の「鞭」を「ふち」(13オ7行)とした例が、「むち」の例に混つて見られる。フチは、辞書の類を中心に、古くからその存在を確認できるものであるが、少なくとも近世の初めには、「片言」が、「一馬の鞭^{ウチ}を」○おちはわろしと云り鷹猿^{トビ}の時には。おちといふとぞ」(四 器財部)と判定を下すことからすれば、知識人の間では、ムチに比べて品位の劣ることばと意識されていたことがわかる。また、「言う」を「い・ふ」と割らずに「ゆふ」と伸した例も認められる(11ウ6行・12オ5行)が、室町時代の話ことばの上では、そのような長音の発音が普通であったことが、すでに知られている^{注12}。そして、それとは逆に、「結う」を「いう」(27ウ9行)と記したのは、「言う」との類推による誤れる回帰の現象であるか、あるいは、マユ(眉)に対してマイ^{注13}がそうであったように、口頭語的な形の現れであると考えられる。

この写本からは、以上見てきたように、口頭語的な特徴を、ところどころに拾うことができる。そして、その点を、問題の「くすりゆひ」の解釈に結びつけるならば、この表記も、同様に、当時の口頭語が顔をのぞかせた一例であるとみなすことが、十分可能と思われるのである。

しかし、口頭語の現れやすさが起因するところの、粗雑な表記態度は、同時に、深い意味のない単純な書写ミスを生み出す原因ともなることにも、注意を向けなければなるまい。「し(之)」と「り(利)」の平仮名の字体の近似性、特に、「す(春)」から続く場合の類似は、そのような書写ミスを助長したかもしれない。この写本には「くるし指」というおそらく「くすし指」を誤った表記も現れていたことはすでに触れたが、そうした誤写に無頓着な姿勢が、「くすりゆひ」という、現実には存在しない語形をあるかに見せかけた文字連続を生じさせた疑いもないとは言い切れないであろう。この写本から、近世初頭におけるクスリユビの存在を認定することに、多少の困難を感じるのは、今述べたような問題が残るからである。

四・三 漢字書きの例について

クスリユビの発生時期を、いつまでさかのぼらせうるかという点では、「薬指」「薬ゆひ」のような漢字書きの例を、どう考えるかも問題となる。すなわち、室町時代成立のいくつかの文献には、そうした漢字書きの例が見られるのであり、これらがクスリユビを表記したものと認められるならば、室町時代にすでにクスリユビが存在したことの根拠となりうるわけである。

前田氏は、そのような漢字書きの用例を、『酌并記』(天文・永禄頃

成立)、『瀬津松鷗軒記』(室町末期成立)、『金瘡秘伝』(小笠原長時(一五一九〜八三三)の家伝)から引かれた。加えるに、『人天眼目抄』の例を挙げる事ができる。しかし、前田氏はそれらの例(人天眼目抄)は除くが、クスリユビと読まれた可能性を否定こそしなかったものの、同時代の仮名書きの例がみなクスリユビであることから、クスリユビを示すものと判断された。ただし、それらをそのままクスリユビと読めないものか、素朴な疑問が湧くことも確かである。

さて、この問題において、「薬指」「薬ゆひ」の例を、室町時代にクスリユビが存在したことの根拠とするためには、次の二点を証明しなければならぬ。すなわち、当時、クスリユビに対して「薬指」「薬ゆひ」と当てる表記法はなく、これらは必ずクスリユビと読みうること。および、それらの表記が書写過程における改変によるものではなく、原本にさかのぼりうるものであること。その二点である。

まず、前者の点については、室町時代におけるクスリユビの漢字での確実な表記法が、「薬師指」「醫指」であったことは、『就弓馬儀大概聞書』や『孟子抄』の古写本から知られるところである。また、「薬」の形の複合語が、クスリと読まれた場合を探してみても、それはなく、室町時代およびその前後の時代には、「薬師」「薬玉」などクスリの場合を除いて、すべてクスリと読めるものばかりである。したがって、もし「薬指」がクスリユビと対応せず、クスリユビを表すものであったとしたら、それは、極めて特殊なケースであったことになる。

次に書写上の改変という点については、第一に、「薬指」「薬ゆひ」と記す写本に、江戸時代以降のものしか残っていないことに注意すべきである。つまり、その書写の過程で、「くすしゆひ」→「くすり

ゆひ」↓「葉指」という誤写による、あるいは意図的な改変が行われた可能性を指摘することができる。「酌并記」のように、「葉指」とする写本（宮内庁書陵部蔵本二種、内閣文庫蔵本）と「くすしゆひ」と書く写本（内閣文庫蔵「酌并座中立振雑々」）の両方が存在することは、その可能性を示唆する。また、『就弓馬儀大概問書』においても、「葉ゆひ」と記す江戸時代中期の写本が存在し、同時に、室町時代末期の一本に「葉師指」という表記が現れることは先に述べたが、前者は後者のような表記から、「師」の脱落によって生じたことが考えられる。他の文献の場合にも、同様の疑いをもってみる必要がある^{注15}。

しかし、「くすし」↓「くすり」↓「葉」という二重の改変は、そうたやすく起こりうるものではないように思われる。平仮名書きの場合ならともかく、『金瘡秘伝』のような片仮名書きの場合には、「シ」と「リ」の字体の類似性は強くなく、したがって、写しまちがいによる変化は生じにくかったのではなからうか。「葉師指」の「師」の脱落も、それほど頻繁に起こったとは考え難い。

以上のように、「葉指」「葉ゆひ」という漢字書きの例については、問題が複雑で、それが室町時代のクスリユビの存在を証しうるものか否か、判断の決め手を欠いていると結論せざるをえない。ただし、頭から否定的に考えるわけにはいかないことだけは確かである。

なお、もしこれらの表記が、クスリユビを表したものであるとしたら、それがたとえ原本にさかのぼることのできない書写時のものであっても、その書写の時期自体が比較的早い次の三本は、江戸時代中期にはクスリユビが相当普及していたことを示す、貴重な用例となりうるかもしれない——東大史料編纂所蔵江戸初中期写

『人天眼目抄』の「葉指」（巻六27ウ、抄物大系52ペ）、宮内庁書陵部蔵江戸中期写『美人草』の「葉」「葉ゆひ」（巻一1ウ）、内閣文庫蔵享保三（二七一八）年写『金瘡秘伝集』の「葉指」（第三冊8ウ）^{注16}。

四・四 傍証とまとめ

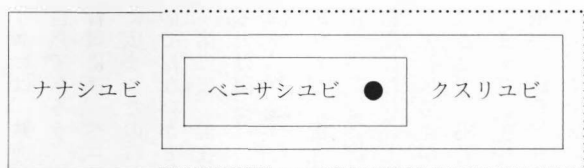
以上の他、注意すべきこととして、次の二点が挙げられる。すなわち、クスシユビという語の安定を語源意識の面で支えるクスシ（葉師）という語が、室町末期にはイシャへの交替を相当進めており、クスシユビの代わりに、わかりやすい語（例えばクスリユビ）への志向が人々の間で高まっていたと推定されること。および、葉は葉指で付けるという習俗が、平安時代以降の文献に見られ、クスリユビの命名が、いつ起こっても不思議ではない状態にあったこと、である。これらは、クスリユビの発生を中世にさかのぼらせる傍証となりうるかもしれない。

さて、ここまでの文献の検討により、室町時代の終わり頃には、クスリユビがすでに存在していたことをうかがわせるような直接・間接の徴証を、二・三得ることができた。しかし、結局、そのいずれもが程度の差こそあれ、決定的な証拠となりえないものであった。中世におけるクスリユビの存在を確かなものと認めるためには、次の、方言分布の解釈を待たなければならない。

五 葉指の方言分布

五・一 周囲分布型としての把握

日本アルプスを境として、東日本がクスリユビ一色で覆われ、西日本にベニサシユビが優勢な葉指の方言分布は、いわゆる東西対立



分布の一典型として取り上げられることがあった。^{注17}しかし、歴史推定のための材料としてこの方言分布を見ると、これを東西対立型とのみとらえたのでは、おそらく、その歴史的解釈を誤ることになる。

すなわち、佐藤寛一氏や加藤正信氏が指摘す^{注18}るように、クスリユビは西日本各地にもベニサシユビと混在して分布が認められるのであり、必ずしも典型的な東西対立型とは言い切れない。クスリユビの分布のみに注目すれば、それはむしろ、全国型と呼んでさしつかえないものである。

さらに、西日本において、ベニサシユビの勢力はほぼ九州でとどえるが、その西辺の島々には、クスリユビが目立つ。とりわけ琉球のナナシユビと直接接する奄美大島には、ベニサシユビはなく、クスリユビが優勢となっている。この日本西端のクスリユビの分布を重視すれば、それは、東日本の広大なクスリユビの分布と相呼応して、西日本のベニサシユビを包囲する形となり、ここに佐藤氏が述べる通り、周囲分布型としての把握が可能となる。

今、琉球のナナシユビをも視野に入れ、葉指の方言分布を図示すると、およそ右のように抽象化しうるであろう。

五・二 クスリユビの共通語的伝播の可能性

右で把握した周囲的方言分布は、それにそのまま周囲論を適用し、

解釈することができる。しかし、その前に、西日本のクスリユビの分布が、共通語化によって形成されたものであるという可能性を、検討しておきたい。

その可能性とは、すなわち、以下のようなものである。——クスリユビは、東日本中心の分布形態から見て、もともと東国出自の語であり、西日本とは無関係なものであった。それが、東京にみやこが移るなどの理由で、共通語としての地位を獲得するに至り、西日本各地にも学校教育やマスメディアを通じて、いわば散布された形に爆発的に広まった。西日本における、ベニサシユビとクスリユビとの混在分布の原因は、そこにある。——もし、この解釈が正しいならば、クスリユビは、中央上方語の歴史とは、直接には関わらないことになる。

確かに、西日本における、ベニサシユビとクスリユビとの併用地点の話者の意識を、『日本語地図』の原資料に戻って見ると、クスリユビの方を新しいとしたり、あるいは学校で教わったことばだとするものが目立つ。これは、先の解釈が一面で正しいことを意味する。西日本のクスリユビの中には、共通語の定着によるものが含まれているのであろう。

しかし、方言地理学的解釈とは、何よりもまず方言分布のありさまを解釈のよりどころとするのであり、その点から見ると、西日本のクスリユビを、共通語の伝播という原因のみで説明することは、やはり難しい。

第一に、西日本におけるクスリユビの分布は、ベニサシユビと混在しているとはいえ、相当強力なものである。したがって、それらすべてを、共通語の伝播による形成と考えるには無理がある。なお、

『日本言語地図解説』3 (43ペ)には、西日本にもともと薬指の名称をもたない地域が多く、共通語形を受け入れやすかったという可能性も指摘されているが、文献上確認された「薬は薬指で付ける」という習慣は、地方にも存在するし、また、薬指自体に治療上の呪力を認める地域もあるから、そのような伝承が人々の間に生きていた時代に、薬指に名前が無かったということは、考えにくい。

第二に、ベニサシユビとクスリユビの分布を詳細に比較すると、『日本言語地図解説』3 (42ペ)が述べるように、クスリユビの方が山間部にまとまった領域をもつ傾向が認められる。そのようなクスリユビは、共通語の定着と考えるより、古語の残存とみなした方が自然であろう。それらの地域が、ベニサシユビに侵食されなかつた背景には、ベニサシユビが紅の普及とともにまず町部を中心に急速に広まったのに対し、辺地への伝播が遅れたという事情が、あつたのではないかと推定される。

第三に、混在分布は、必ずしも共通語化による混乱状況を意味するとは限らない。すなわち、このベニサシユビとクスリユビの場合には、今述べたような分布の偏りから、ベニサシユビの特殊な伝播の仕方が、混在分布形成の一因となつたことを推定しうる。また、『日本言語地図』の回答者の中には、ベニサシユビを女性のことばと意識したり、上品な言い方と感じる人々がいるから、そのようなニユアンスの差が、ベニサシユビの伝播後も、クスリユビを完全に消滅させず、両者の共存を許したという可能性も強い。

そして、第四に、周囲分布の一端をになうとしてすでに指摘した、奄美大島など九州以西の島々のクスリユビの領域に注意したい。分布上、ナナシユビとベニサシユビとの間には含まれた、このクスリ

ユビの領域の成立は、共通語化という理由によつては、説明しがたいものと思われる。

さらに、先の、クスリユビがベニサシユビより新しいという話者の意識も、話者が自分の時代に共通語として習得したクスリユビについて言つたものであり、実は、その土地では古く、方言としてのクスリユビからベニサシユビへの交替が起こつていたと考えることもできる。それは、つまり、クスリユビ \rightarrow ベニサシユビ \rightarrow クスリユビという、いわばユーターン現象を想定することになるが、実際、方言地図の中に、そのような古いクスリユビの層と、新しいクスリユビの層の二種類が認められることは、糸魚川地方という狭い地域注19の分布を詳細に検討されたグロウターズ氏が、すでに指摘している。

五・三 クスリユビの歴史的位置

前節の考察に従えば、西日本のクスリユビは、その中に、共通語の影響によるものを含むことは否定できないものの、基本的には、ベニサシユビに侵食される以前の、古語の残存と認められる。これに、周囲論を適用して解釈するならば、まず、クスリユビが全国に向けて広まり分布を形成した後、ベニサシユビがそれに覆いかぶさるように伝播したのが、現在見る方言分布の姿ということになる。

これを、中央(上方)の語史に還元すれば、中央では、クスリユビの発生は、ベニサシユビの発生に先行したものと位置付けられる。さらに、琉球諸島のナナシユビを視野に入れることにより、中央における薬指の名称は、ナナシユビ \rightarrow クスリユビ \rightarrow ベニサシユビの順に交替したと考えることができる。

ところで、方言地理学的方法では、そのような交替の順序を明ら

かにしえても、それらの語の使用時期の推定までは難しいと言われている。ただし、この索引の場合は、その分布が比較的単純であり、かつ、文献の用例および文化史上のできごとを参考にできるので、かなりの程度、時代の推定が可能である。

まず、ナナシユビはほとんど琉球にのみ分布するから、その中央からの放射は、相当古いと思われる。前田氏の挙げられた文献の用例も、一二世紀以降のものは、ほぼ、「無名指」という漢語表現に固定化してくる。したがって、和語ナナシユビの日常語としての使用は、せいぜい平安時代にとどまるのではなからうか。

次に、ベニサシユビは、文献上の初出が『日葡辞書』であり、近世に多くの用例を見る語であるが、その発生をいつまでさかのぼらせるかと言うに、紅の使用が一般に普及したのが近世であること^{注20}を考慮すると、中世末よりさほど古い成立とは考えられない。もちろん、紅は貴族の間でもっと古くから使われており、したがって、この語が、上流貴婦人の間では早くに命名されていたことは仮定できるとしても、地方への放射の前提となる庶民層での使用は、やはり、紅の下層への普及の時期を待たねばならなかったと思われる。また、方言分布上のベニサシユビの広がり具合を見ても、ベニサシユビの中央からの放射の時期を中世末頃に設定することに、特に大きな違和感はない。

さて、このようにして、中央におけるナナシユビとベニサシユビの使用時期の下限あるいは上限を推定していくと、その間にくるベキスリユビの時代は、おのずとしぼられてくる。すなわち、クスリユビは、ナナシユビが衰退する平安時代から、ベニサシユビが優勢になる江戸時代に至る間の、中世という時代を中心に、その生命

を保った語と位置付けられることとなる。方言分布に目を転じて、クスリユビの分布は、東日本一円を覆い、かつ西日本でも奄美に到達するほど広汎なものであるから、その中央からの放射は、やはり中世にさかのぼるとみるのが適当である。^{注21}

ところで、方言分布の形成史に関する研究は、現在のところ立ち遅れていると思われるが、今後、それを進めていくためには、類似の分布を示す項目を集め、それらが文献上の事実とどう対応するか、分布型ごとに史的特徴を探っていくことが、まず必要となる。そのような考察は、別の機会に詳しく行うべきであるが、ここでは、クスリユビの時代性についての推定を補強するために、とりあえず、東西対立的な分布を示す項目を『日本語地図』から取り上げ、東日本に優勢な語が、いつごろから中央の文献に現れるか、大体的に見通しをつけてみた。すると、その結果は、東日本の語が、西日本にどのくらい分布をもつか、その程度に左右されることがわかった。

すなわち、東西対立が顕著で、東日本の語が、西日本に全く存在しないか、あるいは存在してもわずかな場合には、その語は、東国系・江戸系の文献には用例があっても、上方系の中央文献には使用が認められないことが非常に多い(例えばショウウ(背負うホツカナイ(恐ろしい)、ホツペタ(類)など)。一方、東日本の語が、西日本において、各地に混在したり、あるいは一箇所に固まったりして比較的目立った分布をもつときには、その上方系中央文献への登場の時期はさかのぼり、室町時代以前であることが多くなる(例えば、イル(居る)、コヌカ(糠)、カガシ(案山子)など)。

このような結果とその意味するところについての詳しい説明は稿を改めることとし、話しをクスリユビに戻すと、この語が西日本に

かなり広い分布をもつ以上、その中央での成立を中世に位置付けることは、今見たような東西対立的分布の一つの史的傾向からも、十分支持されることと言える。

六 む す び

クスリユビが中世にさかのぼる語であることが明らかになった以上、文献上、中世の代表語であったクスシユビとの関係が問題となる。しかし、その答えは、すでに第三節において提出し終えていた。すなわち、クスシユビとクスリユビとは、薬指の名称の変遷上、中世社会において共存した語であり、主として前者が上層語・文章語、後者が庶民口頭語として位相を分かち合っていたと考えられる。そして、その位相差ゆえに、両語は、文献と方言への出現のさまを著しく異にする結果となったと、結論付けられるのである。

なお、クスリユビのように、中世、中央(上方)において、文献上の用例は少ないが、一般の話しことばの中ではよく使用され、それが方言上、東日本中心の分布を形成するに至ったという類例としては、カガト(踵)、カツグ(担ぐ)、キノコ(茸)、クルブシ(踵安)ム・ケブ(煙草、ゲ(刺)、ヒマゴ(曾孫)などが挙げられるのではないかと思う。もちろん、その一々の検討には、慎重な手続きを要しよう。

最後に、前田富祺氏は、語彙史のレベルとして、資料に制約を受けた「事実としての語彙史」と、その背後に考えられる、位相的にも地理的にもはるかに広い「存在としての語彙史」とを区別し、語彙史を考えると、すなわち、後者を前者へ「手繰り寄せてくる作業」であると言われた。^{注22} 本稿は語彙史に至らず語史の段階に留まる

ものであろうが、しかし、その趣旨は、ちょうど今述べたような作業の一つの試論として位置付けうるであろう。そして、このような文献と方言との総合により国語史の位相の広がりを知ろうという試みは、現在のところ、個々の語の範囲にその対象を限られているものの、しだいに、語彙としてのまとまりの変遷や文法・表現法・言語行動の変遷、さらには、そこに反映した思考法の推移など、国語史の全体へと視野を広げていかなければならないと考える。

注1 小林隆「方言の史的位相性」(『国語語彙史の研究』8 昭62・11、和泉書院)

注2 小林隆「顔」の語史」(『国語学』132 昭58・3)、「文献と方言分布からみたへくるぶし(踵)」の語史」(『国語学研究』22 昭57・12)

注3 前田富祺「指の呼び方について」、『語彙研究資料としての節用集』(『国語語彙史研究』昭60・10、明治書院)

注4 クスシユビは、『日本語地図』以外の資料にも見出していない。また、方言上、s v rの音変化が起こった地域は知られておらず、したがって、中央語との音韻対応により、クスリユビをクスシユビに還元しようというケースもない。

注5 クスユビについては、徳川宗賢編『日本の方言地図』(昭54・3、中公新書149ページ)、イシャユビについては、それと、国立国語研究所『日本語地図解説』3(昭43・3、大蔵省印刷局)43ページ、グローターズ『日本の方言地理学のために』(昭51・11、平凡社)152〜154ページ、この解釈をとる。

注6 文献上有力な語が方言に現れない現象を、位相的な偏りにより説明したものに、すでに、カゲロウについて扱った加藤正信「国語史と言語地理学——「蜻蛉」を例として」(『文学・語学』66 昭48・3)がある。

注7 松村明他「シンボジウム日本語1日本語の歴史」(昭50・10、学生社)

204以下。

注8 前田富祺氏も、注3に示した前者の論文の末尾の変遷図(582)では、クスリユビの発生を大幅にさかのぼらせて、一五世紀ごろに位置付けている。しかし、本文での記述からその図に至る飛躍についての説明は、なされていない。本稿が問題にしようとするのは、その説明をどう行うかということである。

注9 およそ成立時代順に、以下に列挙する。「教訓抄」「長谷寺靈驗記」「撮壤集」「就弓馬儀大概聞書」「諸仲卿威人奏慶記」「体源抄」「孟子抄」「岡本記」「酌井記」「禰津松鷗軒記」「金瘡秘伝」「女房進退」「日葡辞書」「藤葉栄衰記」。

注10 亀井孝「口語の慣用の徴証につきその発掘と評価」(「亀井孝論文集」5 昭61・8、吉川弘文館)

注11 坂梨隆三「江戸時代の国語上方語」(昭62・9、東京堂)126・127頁。

注12 注10の亀井論文、佐藤喜代治「国語語彙の歴史的研究」(昭46・11、明治書院)158・159頁、鈴木博「周易抄の国語学的研究研究編」(昭47・3、清文堂)227・229頁など。

注13 注1の拙論279・280頁。

注14 「藤葉栄衰記」の用例も一六世紀のものとしてあるが、この書の成立年代は不詳と思われるので、考察の対象から除いた。

注15 さらに、「人天眼目抄」の場合には、東大史料編纂所蔵江戸初中期写本にのみ「桑指」(抄物大系512頁)が現れるが、それを含む前後の部分に、講者の川僧慧濟の所説ではなく、後の書き入れであることが推定されている(坪井美樹「人天眼目川僧抄三本私見」「千葉大学教育学部紀要」28-1 昭54・12、108頁)

注16 このうち、「人天眼目抄」については、当然、東国語の混入の可能性を考慮する必要がある。しかし、「美人草」や「金瘡秘伝集」および、先の内閣文庫蔵「就弓馬之儀大概聞書」の用例からすれば、上方でも江戸初中期、クスリユビが存在したことは推定される。もちろん、以上の文献すべてが東国系の作者や書写者の手になるものであれば話

しは別であるが、それを示す十分な根拠は今のところ得ていない。

注17 佐藤喜代治編「新版国語学要説」(昭48・3、朝倉書店)308頁、およびそれを踏襲した馬瀬良雄「東西両方言の対立」(「岩波講座日本語11方言」昭52・11)238頁。

注18 佐藤亮一「方言の語彙—全国分布の類型とその成因」(「講座方言学1方言概説」昭61・5、国書刊行会)154・155頁、加藤正信「方言分布から見た日本語の古層」(「言語」16-7、昭62・6)170頁。

注19 注5の著書150頁。

注20 平凡社「大百科事典」4(77頁)、小学館「万有百科大事典」13(54頁)など。

注21 クスリユビは、ベニサシユビが使われ始めたと考えられる室町末期以降も急激に衰えることなく、しばらくは使用され続けたと思われる。なぜならば、ベニサシユビについて方言上の使用者が意識する「女性語的」「上品」という特徴は、そのまま中央のベニサシユビにもあてはめることができ、そのようなニュアンスの有無が、ベニサシユビとクスリユビの共存を保持したと推定されるからである。

注22 注3の著書74頁、832頁など。

(付記) 本稿は、第25回国語語彙史研究会(昭62・4)において「位相論的語史の可能性」と題して発表した内容に基づき、それに、国立国語研究所で行っている「方言分布の歴史的解釈に関する研究」で考えたことを取り込んだものである。

— 国立国語研究所員 —